



2009/02/07
『カティンの森』上映会で、
ラデックさん(左から2人目)
写真提供:富山信夫さん

POLE

第69号 2011.4.1
北海道ポーランド文化協会誌

発行
北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北32条
西5丁目2-31-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610



4月16日~17日
北大学術交流会館



ポーランド
現代映画
セレクション
2004-2009



第55回 例会ご案内

会員には招待券を一枚同封しています

当日 一般 1,200 円 / シニア 1,000 円
学生 500 円

前売り 一般・シニア / 1,000 円

このたびの東日本大震災により犠牲になられた方々、また被害を受けた多くの皆様にお悔やみとお見舞いを申し上げます。

とても他人事とは思えません。

私たち、上記の上映実行委員会は救助活動や避難生活のお役に立てるよう、収益の一部を寄付したいと考えています。

駐日ポーランド共和国大使館の協力あつての上映会がついに、実現します！日本での公開があまりに少ないポーランド映画の傑作を、道内初公開。おまけに当日は、一等書記官ラデック・ティシュケヴィッチさんがご来札。

さらに、ドキュメンタリー監督のヴァルデマル・チェホフスキさん(ロドヴィッチ大使の夫)のご参加も急きょ決定！

4作品はどれも興味深いです。なかでも『裏面』サビナ役の激情的な行動とおっとりした物腰がアンビバラントに共存する描写は陰影に富み、とてもエキセントリック。美しすぎる光が差し込む室内の映像や繊細で華奢な所作など・・・みどころ満載です。かつて、「ポーランドの政治的不条理」をテーマにした映画をみたことのある人も満足します。

今回の「ポーレ」は作品の紹介を7ページにわり組みました。悲劇の中にも品格ある都市ワルシャワや、古都クラコフの街並みや静かなたたずまいがスクリーンに現われます。乞うご期待！

氏間多伊子 (上映実行委員)

開始時刻 (終了時刻)	4/16(土)	開始時刻 (終了時刻)	4/17(日)
11:00 (12:40)	ぜったいにダメ!	11:00 (12:50)	救世主広場
12:45 (13:00)	<書記官の舞台挨拶>	13:10 (14:50)	あなた、嘘をつかないで
13:20 (15:00)	裏面	14:55 (15:10)	<書記官の舞台挨拶>
15:20 (17:10)	救世主広場	15:30 (17:10)	裏面
17:30 (19:10)	あなた、嘘をつかないで	17:30 (19:10)	ぜったいにダメ!

4作品 日本語字幕付き

詳細は同封の折り込みチラシをごらんください。

主催：ポーランド現代映画セレクション2004-2009 実行委員会 (北海道ポーランド文化協会・札幌映画サークル)

協賛：駐日ポーランド共和国大使館

後援：札幌市、札幌市教育委員会



上映 4 作品

“民族の傷” 捉え直す新世代の映画作家たち

--- 『裏面』に見るワイダ的伝統への敬意と挑発 ---

実行委員長 佐光 伸一



『ぜったいに
ダメ!』
(2004) 100 分

リチャルト・
ザトルスキ監督



『裏面』
(2009) 96 分

ボリス・
ランコシュ監督

2009 年度ポーランド
劇映画祭グランプリ
受賞作品。



『救世主広場』

(2006) 105 分
ヨアンナ・コス
ニクラウゼ、
クシシュトフ・
クラウゼ監督

2006 年度ポーランド
劇映画祭グランプリ
受賞作品。



『あなた、
嘘をつかないで』

(2008) 100 分
ピョートル・
ヴェレシニャック
監督

東欧諸国の映画には歴史をテーマとしたものが多い。第二次世界大戦、スターリニズム、ソ連共産党による支配など、多くの歴史の負の遺産を抱えるからである。これらの国の芸術家たちは、文学、美術、音楽、映画を通し、「民族の傷」を表現し続ける。ポーランドもその例外ではない。『地下水道』、『灰とダイヤモンド』などにより我が国にも多くのファンを持つアンジェイ・ワイダの一貫したテーマとなっているのは、「歴史の被害者」としてのポーランドの姿と言える。

映画の中で歴史を描くには、大きく分けてふたつのアプローチがあると思う。ひとつは、取り上げる歴史的事件を、史実に忠実に描こうとする姿勢である。その出来事を忘却の淵から救う、民族としての記憶に刻むことを志向した映画である。その代表的な映画作家がワイダである。抵抗三部作、『大理石の男』、『コルチャック先生』、『カティンの森』など彼の作品はすべてこの原則に基づき創作されている。

ふたつめのアプローチは、歴史をテーマとしながらも、時代を超えた普遍的なものをそこに描くという姿勢である。描かれている時代は過去であるが、善と悪、人の心の闇など、そこに潜む普遍的なものを、そこに描くという姿勢である。描がられている時代は過去であるが、善と悪、人の心の闇など、そこに潜む普遍的なものを浮き上がらせる。過去を鏡として、現在のわれわれの姿を映し出す。

こちらの代表的な映画作家は『エロイカ』、『パサジェルカ』などを制作したアンジェイ・ム



『パサジェルカ』

ンクそして今回ご紹介するこの『裏面』の監督であるボリス・ランコシュもそのひとりであると言える。物語は、1952年、スターリン主義に支配される首都ワルシャワ。独身女性サビナはある夜、非行少年に絡まれたところをダンディなブロニスワフに助けられる。ふたりの仲は急速に接近し、やがて深い関係に。しかし実はブロニスワフは秘密警察の手先であり、彼女に協力を命じる。その時、彼女が取った行動を巡り、物語は急展開していく。

監督のボリス・ランコシュは1973年生まれの38歳。本作が本格的な長編デビュー作である。デビュー作でいきなり「スターリン主義」というこれまでポーランド派の巨匠たちが取り上げてきたテーマを取り上げる。

ナチスドイツへの蜂起を描く『地下水道』、その後ソ連に解放されたが共産党に対する反乱分子を抱えるポーランドを描く『灰とダイヤモンド』、そして『裏面』はそれに続くソ連による独裁体制が確立した1950年代初頭を描いている。監督がポーランド派の伝統の継承を意識していることは明らかである。しかしそれは伝統に対するオマージュではなく、むしろ挑発、パロディなのである。ワイダを代表とするポーランド派に特徴的なのは、歴史におけるヒロイズムである。『地下水道』をさまよう人たち、『灰とダイヤモンド』の青年マチェクなど、歴史と戦い美しく敗北していく主人公たちの姿を描いていく。

しかし『裏面』では市井の3人の女性のしたたかさが、巨大なスターリン主義という悪にささやかな勝利を上げる。体制に順応できず反乱分子となった『灰とダイヤモンド』のマチェクと、体制に順応し秘密警察となった『裏面』のブロニスワフはともに政治システムが理由で命を落とす。正反対のふたりは同じコインの表面と裏面である。

ワイダの作品では、善と悪とははっきりと描き分ける。悪のイメージを担うのは、ナチスドイツであり、ソビエト権力。ワイダは歴史の不幸のすべての源泉を

『灰とダイヤモンド』





外部の敵に求めることで、ポーランド人の民族としての誇りに訴える。

ランコシュの『裏面』では、スターリン主義をテーマにしているにもかかわらず、ロシア人は直接登場しない。登場人物たちは、ソ連の支配にさまざまな形で翻弄されるポーランド人たちである。そのことによって歴史の意味をポーランド人のモラルに鋭く問いかける。歴史を捻じ曲げてきたのは自分たち自身ではなかったのかと。

この作品のあるエピソードでは、一枚のコインが象徴的に描かれる。コインの「おもて」と「うら」が意味するものは何であろうか？まずは歴史の「おもて」と「うら」。教科書で描かれる国家、民族という「おもて」の歴史と、そこに生きる一般庶民の「うら」の歴史。大義のために死ぬことと、したたかに生き残ることの対比。ダンディな紳士から野獣的な権力の手先に変身するブロニスワフの2面性。それよりはるかに恐ろしいのが、主人公サビナの清楚で生真面目、従順な彼女の意外性。人間の内面の底知れぬ深さを感じさせる。観客それぞれが監督の仕掛けたさまざまな「おもて」と「うら」を読み解くことで、自身の持つ価値観をもう一度根底から問い直すことになる。サビナの取った行動ははたして正義なのか、その延長線上にある現在の幸福の意味とは何かを。

『裏面』は、スターリン主義の時代をモノクロで、21世紀の現在をカラーで描写している。モノクロシーンに、当時のニュースフィルムや街の風景の映像を巧みに組み合わせることでドキュメンタリーのような効果を生み出すというポーランドの伝統的な手法を利用している。その一方、影やコントラストを多用した色調やセットで撮影したり、集合住宅の一室を舞台にすることで閉塞感を表現し、欧米のフィルム・ノワールの伝統も取り込んでいる。ジャズの即興的な音楽を効果的な使うなど全体としてスタイリッシュな作品に仕上がっている。

ポーランド映画ファンなら思わず嬉しくなるような過去の名作に対するオマージュ(パロディ)もふんだんに取り込まれている。母親役のクリスティナ・ヤンダは、『大理石の男』、『尋問』というやはりスターリン主義を描いた作品の主人公を演じていた女優。両作品では権力と闘う戦士だった彼女が『裏面』では笑いを誘うコミカルな役を割り当てられている。

また映画の冒頭の映画会社のクレジットが出るところにご注目いただきたい。タイプライターの音に合わせて「KADR」という制作会社の名称の活字が現れる。これは『地下水道』、『灰とダイヤモンド』の冒頭とまったく同じである(もちろんパロディ)。このような「オタク心」を刺激するようなサービス精神にもあふれている。

私事で恐縮だが、筆者は今年の3月久しぶりにポ

ーランドを訪れた。旧知の映画研究者や友人に「最近のお勧め作」と聞いた際に、口を揃えて出てきた作品が、本作『裏面』であった。このような早いタイミングで



子供たちを守ることに生命を捧げた実在の人物ユダヤ人孤児院院長『コルチャック先生』

字幕付きで札幌で鑑賞できるのは、ひとえにポーランド大使館のおかげである。この場を借りて感謝の言葉を述べたい。

(さみつ・しんいち/ 実行委員長・北大学術研究員)

最高！お茶の間試写会

～実行委に参加して～

中村 京子

新年早々から実行委員会に参加している。こんな活動は何年振りだろう？とにかく久しぶりなので、初めて経験するような新鮮な気持ちでやっている。

2月13日、50インチテレビを持っている会員のお宅で上映予定の作品を観る機会があった。急きょ決まった小さな実行委試写である。実行委員ら8人が居間に思い思いに陣取ってアットホームな雰囲気。持ち寄った食材で手巻き寿司を握って食べ、ワインやウーロン茶で喉を潤す。1作終るごとにコーヒープレイクもあり、感想や意見を語り合う楽しいひと時を過ごせた。

でも私自身久しぶりに3本もの映画を続けて観たから次の日はあくびが止まらず困った。本番では両日も4本上映するが、流石に試写は全部観ようとはならなかった。『裏面』『あなた、嘘をつかないで』『救世主広場』の3本を観たのだが、それぞれ特色があって面白かった。もう1本の『ぜったいにダメ！』は当日の楽しみに残した(ホネは疲れたから)。



現代のポーランド映画を知りたい方は是非4本観るようお勧めしますが、時間が無く1本だけと言う方には、私としては『裏面』をお勧めします。

私にとってポーランド映画はあまり馴染みの無いものとなってしまっていたけれど、最近のポーランド映画をまとめて初公開できるこの機会を嬉しく思うし、お金を払って観る価値のある作品であることは間違いないので会員はもとより、お知り合いの皆さまにもぜひ観ていただけたらと思います。

(なかむら・きょうこ/実行委員・札幌映画サークル)



金貨の『裏面』にひそむ秘密

トマシュ・スタシンスキ
(在札幌ポーランド人)



『裏面』(2009) ボリス・ランコシュ監督

映画『裏面』の出来事は、スターリンによる弾圧が頂点に達していた1950年代のワルシャワを舞台にしている。その当時は例えば、金貨を所有していること、自分の考えを表明することなどが犯罪であり、昼も夜もいつ何どき公安部がやって来て逮捕されるか分からなかった。同時にそれは戦争の破壊の後ようやく正常な生活に戻りつつあったワルシャワであり、店や映画館が姿を見せ、通りは市電や初めて登場した自動車であふれて始めていた。

(※以下ネタバレ可能性あり)

家族の平穏と安全のため

主人公は独身で、内気で、あまり魅力的ではない、ちょうど30歳になったばかりの女性である。サビナ＝写真左＝が願うのは、何よりも安定であり、政治には関心がないように見え、文学出版社で働き、そこで大好きな詩に携わっている。

やすらぎのオアシスは母＝写真右＝と祖母と兄からなる市民階級の家族である。彼らは戦前の中流階級出身であり、映画の舞台である戦後には土地を接収され、政治的に疑いの目を向けられていた階級である。適応し、妥協し、問題を避けるためには、どのような努力をすべきであろうか。社会主義の絵画や新しい高官の肖像画を描いていた兄のおかげで、彼らは、当時としてはぜいたくな、十分に広く、部屋がいくつもある住居と、屋根裏にはアトリエを持っていた。家族の平穏と安全のためなら、サビナの母は戦前から彼らのところに残った一枚の金貨さえ国家に差し出すつもりである。しかしここでサビナは初めて弱さの裏に強い性格を秘めていることを見せ、1ドル金貨を一枚そしてまた一枚と忍耐強く飲み込み、排出し、洗い、そして再び飲み込む。それは公安部による自宅の調査の際に重大な結果を招かないためである。

彼女の唯一の問題は夫がないこと。サビナはオールドミスになることを怯え、母は「年を取ってから寂しいよ」と脅して彼女の夫候補を探し「見合い」

させるが徒労に終わる。

サビナは本当に興味を持っているのは確かな才能を持ったある詩人なのであるが、彼はすでに結婚していて、気難しく、どんな妥協をも望んでいない。彼女もそれ以上の高望みはしない。映画館で記録映画に出てくる半裸の兵隊の姿を眺めている日常だけで十分なのである。

この退屈な地平線に突然、ハンサムで男性的で紳士的なブロニスワフ＝写真中央＝が現れる。彼はサビナに一目惚れし、彼女の方も同じだった。ロマンスが発展した。愛と結婚の名のもと、サビナは彼に教育がないことも、階級が異なることも、強姦のような性交渉も許してしまうのである。

喜劇か悲劇か 女三代

この瞬間から映画の雰囲気は暗くなり、映画のタイトルが意味を帯びることになる。原題の”Rewers”とはポーランド語では硬貨あるいはメダルの裏面のことであり、その通り、サビナ家の3世代の女性たちは裏の性格を見せるのである。表面的には弱く従順な彼女たちが男性よりも決然とし、サビナを救い、ブロニスワフの運命を隠すためなら何に対しても後に引かないのである。こうしてサビナは生き抜き、ブロニスワフの子供を産み、彼の父は、独立のために闘い、公安に殺害された英雄であると子供に信じ込ませて育てるのである。



『裏面』は風俗喜劇、悲劇、フィルムノワール、ブラックコメディの要素を含んでいる。これはとりわけ滑稽な映画ではないが、サビナ家の洗練さや価値観といった戦前に当たり前だったものと、サビナの上司や求婚

者、公安のようなサビナ家にとっては新しく見える、がさつで野蛮なものとの間のコントラストからユーモアが生まれている。

サビナと兄のアレクは、戦争で燃え尽きた詩人ヴォジツキと同じ失われた世代に属す。この世代はポーランドが独立を獲得した最初の時代に生まれ、「神、名誉、祖国」という合言葉のもと愛国主義の

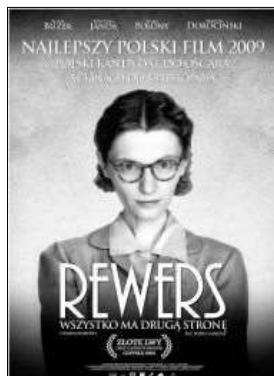


精神の中で生まれ、戦争時代には、アンジェイ・ワイダの『地下水道』の主人公たちのようにドイツとの闘いで活躍し命を落とし、ワイダの『灰とダイヤモンド』の主人公たちのように、その後には共産主義者との闘いで命を落としたり、公安により刑務所送りとなった世代である。

映画の中では兄のアレクが地下組織のために書類を偽造し、サビナはワルシャワ蜂起の際に武器を手に闘う用意があったことが明らかになる。そして今では普通の生活という名のもとに新しい体制と和解しようとしている。生き残るため、安定するための唯一のチャンスは、権力に従順になることであり、多かれ少なかれ妥協することである。彼らのモットーはすでに「神、名誉、祖国」というよりも、「家族、安全、生活」である。

脱カトリック、脱英雄伝説

現在の 21 世紀の視点から見ると、主人国の女性たちに宗教観が欠けていることがとりわけ驚かせる。サビナの家族にとってすべては現世の生活の現実に従っている。病や死は人生の自然な一部であるし、会話の中ではそのように扱われている。結婚は愛がなくても問題なく、結局、愛は永続しない。サビナの祖母は孫娘の秘密を墓の中まで持っていく準備ができていた。その一方でブロニスワフにより身ごもった子供の中絶のことを考える際には、致命的な罪を犯すことになると脅すのではなく、老後の支えとなるチャンスという現実的な視点からサビナを励ますのである。ここで説明しておかねばならないが、中絶は、カトリックのポーランドでは政治上もっとも議論の的となるテーマのひとつである。現在のシーン(画面はカラー)の中で、サビナの息子が、死者の祝日に友人とポーランドに帰国し、この友人がカトリックポーランドのもうひとつのタブーを犯すことになるホモセクシャルであることを暗示しているのは偶然ではない。



この映画はなぜ 2009 年から 1950 年代にまで時代を遡っているのか、考えたみたい。実際、映画の舞台は現代であったとしてもうまくいったはずである。おそらくこれは同じこの時期における、ワイダ作品の大部分の男性的な主人公たちによる偉大な理想の名のもとに行われた運命論や自己犠牲という立場と、サビナ家が最優先する女性的なヒエラル

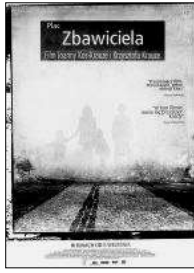


劇的な出会いをしたサビナ(左)とブロニスワフだったが・・・

キーの世界との衝突が問題になっている。そこでは男性たちは何かの問題のために命を落とすか、ヴォジツキのように鬱状態になるか、サビナの兄のようにアルコール中毒になるかであるが、女性たちは、日々の生活に集中し、生き、次の、おそらくはより良き世代を産むのである。

部分的にはこの映画は 2005 年から 2007 年にとりわけポーランドの政治で支配的だったいわゆる清算という傾向について語っている。それは保守的で反共産的で、社会主義時代のポーランドを暗黒時代と捉え、ブロニスワフのように共産主義政権に仕えた者、あるいは彼らに協力した者を清算し、罰し、公的生活から追放し、他人に密告するような右派が政権についたのだった。2009 年にポーランド人の大部分はこのような背景を持っており、一部の人は当時に対し郷愁を覚えていた。『裏面』はこの雰囲気にもマッチしたのだ。それは英雄的な反体制派の伝説を非難し、その代わりに、たとえ新しい現実にも同意するという代償を払ってでも、単に普通に生きることを望む女性たちを主人公としているのである。その一方で、スターリン時代においてさえ、妥協にも一線があり、依然として名誉には意味があったのである。

この作品を外国の観客、とくに日本の観客はどう見てくれるだろうか。歴史的な背景を含めて理解するのは簡単ではない。緩慢な展開や白黒のフィルムは観客に嫌気をおこさせるかもしれない。このテーマ自体が、少なくとも大まかなポーランドの歴史に対する知識を必要とする。しかしこの映画は緻密に練られ、問いに溢れ、当時の社会とポーランド史の断片を描きだす。映画が好きで、ポーランドに多少とも関心を持ち、知的好奇心に満ちた人々は、コインの裏側から多くを知るに違いない。(了)



薄氷の上の危うい幸福

～クシシュトフ・クラウゼの世界観～

佐光 伸一

『救世主広場』

(2006)

ヨアンナ・コス＝クラウゼ、
シュトフ・クラウゼ監督

われわれが映画館に足を運ぶ際、そこに何を求めているのだろうか。退屈な日常生活や厳しい現実を忘れさせてくれるような空想的なストーリーであろうか。いかに寒々としたものであろうと真実と向き合うことで、生きるためのヒントを掴むためであろうか。『トリコロール』『ふたりのベロニカ』などで知られるポーランドの巨匠クシシュトフ・キェシロフスキは同じ素材から結末の異なる2つの作品を創作している。テレビドラマ用に制作され10本の短編映画からなる『デカローグ』シリーズの第5話、そしてそれを長編劇映画用に編集し直した『愛に関する短いフィルム』である。

前者は2人の登場人物たちが今後二度と会うことがないと理解させるような、ドライで簡潔な結末。後者は、これからあらゆることがまだ可能であると思わせる、魅力的な結末になっている。キェシロフスキはその理由を「映画の観客はストーリーを求めるから」と説明している。

『救世主広場』の監督クシシュトフ・クラウゼは社会の問題、日常生活に潜む病理などをドキュメンタリーのように緻密にそして残酷に描き出すことをその作風としている。キェシロフスキ風といえば、「映画の観客」には、あまり優しくない監督と言えるかもしれない。

クラウゼは1953年生まれの現在57歳、ワイダやスコリモフスキーと言った名監督がまだ新作を発表し続けているポーランドでは中堅世代の監督である。この世代のポーランドの監督にしては珍しく、

『救世主広場』を含めると日本ですでに3本の作品が公開されている。

2005年に東京国立近代美術館フィルムセンターで開催された「ポーランド映画、昨日と今日」の中で公開された『借金』(1999)、実在したポーランドの伝説的画家ニキフォルの伝記映画『ニキフォル 知られざる天才画家の肖像』(2004)、そして今回札幌で初上映の『救世主広場』(2006)である。ここでは『救世主広場』を中心としながら、他の作品にも触れることで、クラウゼの描く世界を考察したい。

(以下ネタバレ可能性あり)

『救世主広場』の現実

建築中のマンションを購入した若い夫婦ヴァルテクとベアタは、完成までの間、2人の子供とともに、夫の母テレサのマンションに仮住まいする。しかしマンションの宅地造成業者が倒産したことにより、投資した大金も新居も失う。行き場のなくなった彼らは、母と同居することになる。妻と母との対立、生活の不安、夫の裏切りなどにより、一家はやがて大きな悲劇へと導かれていく。

ここで描かれる日常に潜む小さなすれ違いは、われわれの誰もが日々体験することばかりである。それが積み重なり、大きな悲劇に至る様を、昆虫の生態を観察する生物学者のように緻密に分析的に描き出す。

ここで繰り返されている世界は家族の「モノドラマ」である。母、夫、妻それぞれが自分の価値観に基づき行動し、それは決して交わることがない。それぞれが語ることばは、他者と響き合うことなく、あくまでも自己完結的なモノログなのである。それはカメラワークにも表れている。狭いフレームでの短いショットを積み重ねることによって、ドキュメンタリーのように、対象を動きの中で捉えることで、登場



夫と子どもたちとの幸せな日々。
若い母ベアタに変化が・・・

社会の問題、日常生活に潜む病理などをドキュメンタリーのように緻密にそして残酷に描き出すことをその作風としている。キェシロフスキ風といえば、「映画の観客」には、あまり優しくない監督と言えるかもしれない。



人物たちの孤立感が強められている。最後のシーンは希望をわずかに感じさせるが、それはあくまでも「個」としての良心のめざめであり、他者への信頼が復活する予感はない。

ポーランド人と黒い聖母

救世主広場とは、主人公たちが暮らす通りの名称である。グーグルマップで確認したところ、ポーランドに実際に4カ所このような名称の通りが存在する。しかしここでクラウゼは、何かを象徴的に示しているように思える。「救世主」ということばでポーランド人がすぐに連想するのがヤスナヤ・グラ修道院の「黒い聖母」像の絵画である。1655年、スウェーデン軍がポーランドを侵略した時、ワルシャワやクラクフまでもが占領されたが、ヤスナ・グラ修道院だけはスウェーデン軍の攻勢に屈せず、「黒い聖母」がもたらした奇跡だと語り継がれている。日本での「神風」神話にあたる。その後もポーランド国家受難の際には、必ずこの「黒い聖母」が持ち出され、連帯の時代にはワレサもこの黒い聖母像をピンで下襟につけて活動していたほどである。



マリア像のアイコン。クラクフ近郊のヤスナ・グラ修道院の貴重な宝。

このように聖母信仰の強いポーランド人にとって、救世主とは聖母マドンナの特徴である「母性」、「慈愛」を象徴していると考えることができる。しかし映画の中で描かれる「救世主」の「広場」であるはずの家庭には、「母性」も「慈愛」も存在しない。母テレサも妻ベアタも、仕事、プライベートなど自己の利益にしか関心を示さない。子供たちがこの小さな地獄の中で救いを求めていることに気づかず、2人の対決は悲劇へつながって行く。このタイトルによって、現代の家庭の現実を容赦なく断罪しているように筆者には思える。

都会と村 厳しい格差

この作品における母テレサと妻ベアタの対立は、都会出身の母と村出身の妻という、2人の出身地の違いが背景にある。現代の日本人はすでに、この都会と村という対比に対する感受性を失いつつあるかもしれない。しかしポーランドをはじめ東ヨーロッパ諸国では、都会と村の所得格差、村の若手の高い失業率など、この両者の生活条件の違いが大き

な社会問題となっている。ポーランドを旅行したことのあるものなら誰でも、EUに属するこの国が、地方ではいかに貧困という現実を克服できていないかに愕然とさせられるはずである。映画の中では、村に住む兄の家族は、牧歌的な平和さに包まれ描かれている。都会に出てきたがそこに順応しきれないベアタは、一貫して非理性的な行動を取る。急速に資本主義が浸透するポーランドにとって、従来の村的な価値観が崩壊していく様を、社会学的なアプローチで分析している。

この映画を観て観客にとって一番衝撃的なのが、ラスト近くに出てくるベアタと子供たちの親子心中のシーンであろう。欧米の観客にとっては、馴染みのなさゆえの衝撃であり、日本の観客にとっては欧米でもこの非常に「日本的」な最後の選択肢が存在するのかという驚きであろう。ポーランドはカトリックの国である。よく知られているように、カトリックの国では自殺は厳しく禁じられている。

しかしWHOの最新の国別自殺率のデータを見ると、日本が年間10万人あたり24人で世界第6位、ポーランドは15.2人で世界24位であり、極端に少ないわけではない。ただ社会的風当たりは依然として強いようで、自殺者は通常、「車で轢かれた」となることが多いようである。

心中に関しては、ポーランドのタブロイド紙のデータベースを調べたところ、高校生の親友同士が列車に飛び込む、親子心中に関しては、乳飲み子を抱いた母親がマンションの屋上から飛び降り自殺などの事例が確認できたが、やはりきわめて稀なようである。個人主義の確立した欧米では、生きるか死ぬかを選択する権利はたとえ赤ん坊であっても子供自身にあるという考えが浸透している。映画の中で検事の意見として、未遂であるにもかかわらず「最高の15年の刑が科される」というのは、このような社会背景があるのである。それゆえ監督がベアタに与えた選択がいかに重いものであるかが理解できる。

クラウゼの作品では、いかにわれわれの幸福が薄氷の上に成り立っているかを示す。自分の足が拠り所としている価値観がいかにもろいものか、いかに幸運な偶然が重なり、今日という一日を何事もなく終えることができるのか、そしてそれはある日いとも簡単に崩れさる可能性があることを描くのである。しかし、彼の作品を見た後にわれわれの心に残るのは、人生に対する虚無感ではない。「黒い聖母」像から感じるような、底光りする希望のひかりなのである。幸福はもろく儂い。もろく儂いからこそ愛



おいしいという、生に対する狂おいしいほどの愛情を彼の作品には感じる。当たり前のように享受しているこの幸福は、ある日ふとしたことをきっかけに崩壊する。しかしそれと同時に、その絶望のただ中から希望へ至る道のりもそう遠くはないことを、彼は示唆するのである。

ここで最初の問いに戻りたい。人は何を求めて映画館に足を運ぶのだろうか。クラウゼの作品は、冷酷で厳しい現実をわれわれにありのまま提示する。彼はフィクション性を弱め、ドキュメンタリー的に登場人物を描くことで観客に「これは自分の姿ではないか」と感じさせる。われわれは日々いくつもの選択を行いながら生きている。この選択肢の集積こそが人生なのだ。クラウゼの主人公たちは、われわれが選ばなかった人生、われわれが選ぶかもしれない人生を、われわれの代わりに生きてくれているように思える。彼の作品に触れる時、観客は自らの足元の価値観をもう一度見直すことを求められるのである。

人生の岐路で、なぜか何度も振り返る映画というものがある。クラウゼの作品こそそのような映画であると言える。

ポーランド版

「ブリジット・ジョーンズの日記」

佐光 伸一

初めにお断りしておくが、深遠な哲学を求めて映画館に通うひとには、ここで紹介する2本の映画はまったくお勧めできない。しかし、若いカップルが週末にデートで見に行くような映画こそ、その国を



『あなた、嘘をつかないで』
ピョトル・ヴェレシニャック監督

を知るための一番いい教科書であると考えられるような、心のオープンな方にこそ、ぜひこの2本を観ていただきたい。どのようなタイプの顔がその国で美男美女とされているか、彼ら



『ぜったいにダメ!』(2004)
リシャルト・ザトルスキ監督

にとって手に届く範囲での夢とは何か、そしてファッション、登場人物たちの会話など、興味は尽きない。『ぜったいにダメ!』、『あなた、嘘をつかないで』の2本はともに人気の女性脚本家ウェブコフスカによるものである。ここでは『あなた、嘘をつかないで』について少し紹介してみたい。

アーニャとマグダというふたりの女性は、少しピュアでナイーブすぎる、映画の世界にしか存在しない、非現実的なキャラクターのように思えるかもしれない。しかし筆者にとっては、ポーランド留学中の友人の顔を何人も思い出すほど、典型的なポーランド人女性である。96%の国民がカトリックであるポーランドは、恋愛に対するアプローチが、日本人から見ると少し「オクテ」なのかもしれない。

またぜひ観て欲しいのが、男のダメっぷりである。出てくる男はすべてが情けない。これはこの2本に限ったことでなく、シリアスな映画も含め(今回上映する『裏面』、『救世主広場』も同様)、ポーランド映画では、女性を理想的に、男性を優柔不断か度の過ぎた理想主義者(あるいはそのなれの果てのアルコール中毒)として描く傾向がある。しかし筆者のような男性的視点から見ると、彼らはみな愛すべき馬鹿であり、とても親しみが湧いてしまうのである。

最後にオタク的情報を少し紹介したい。主人公の男性がスポーツジムのサウナに入るシーンがあるが、その背後に見える巨大な建物は、『裏面』の最後のシーンに出てきた文化宮殿である(スターリンからの贈り物)。

主人公マルチンの母親役は、ケシロフスキの『愛に関する短いフィルム』の主演女優グラジナ・シャポウォスカ、叔母のネリーを演じているのは、ワイダ作品にも多数出演している名女優ベアタ・ティシキェヴィチである(『救世主広場』でも本人役でちらりと登場)。

またラスト近くで傷心のアーニャが見ているテレビには『ぜったいにダメ!』の一場面が映っているなどのお遊びもある。ワルシャワとクラクフの美しい風景もぜひお楽しみください!

(さみつしんいち/事務局長・北大学術研究員)



「大成功」の達成感

振り返れば素敵な日々

～ 激動の4ヵ月と3日間～

実行委員長 佐光伸一

いきさつ しがな一研究者である私が実行委員長の重任を与えられたのは、ポーランド留学経験を持ち北海道ポーランド文化協会(以下ポ文協)の事務局を引き受けていることと、映サ会員でもあるという立場による。昨年12月に東京でポーランド映画祭が開かれ、その少し前に作品の上映権を持つ大使館の一等書記官ラデック・ティシキェヴィチさん(以下ラデックさん)から、留学時代からの友人である私に情報がいった。

映サ会員で同じポ文協事務局の北大秘書・氏間多伊子さんを通じて映サに伝えるとすぐ、1月に実行委がスタートした。あとは当日まで、連絡・交渉・会議・作業などあらゆる準備に忙殺された。駐日ポーランド大使の夫であるドキュメンタリー映画監督ヴァルデマル・チェホフスキさん(以下ヴァルデックさん)が行く、ワークショップ(以下WS)を開いてもいいという話は4月になってから“降って湧いた”。連絡したら、なんと福島で撮影中だった。ワークショップでそれを披露してくれないかと新たな交渉になり、決まったのは上映会1週間前だった。

14日(木)監督来道 監督は新千歳に14日の9時35分に到着した。朝早くの出立にもかかわらず映サ岩本さんの車で精力的に動き回った。最初は札幌市こどもの劇場やまびこ座で人形浄瑠璃を見学。ヴァルデックさんは矢吹英孝館長自ら演じてくれた「三番叟」をビデオカメラに収める。和太鼓の響きに共鳴し大感激している。ランチは円山の和カフェ「SALON de Mu-Ya」。円山マダムの隠れ家的なお店で、風流を解さない筆者には場違いだったが、たまたま開かれていた茶道教室の先生が抹茶をたててくださる。そのたたずまい、所作の美しいこと。カメラを回す監督だけでなく同行者一同、時の経つのを忘れた。

江別の「ドラマシアターども」に移動。監督は昨年訪れており、当協会副会長で僧侶の霜田千代麿氏、オーナーご夫妻、喫茶店のお客さんなどと再会を喜ぶ。監督が震災後の東北をカメラに収めた未完成作品『災いーFUKUSHIMAの悲劇』を初上映、活発な意見の交換も行われた。映画のタイトルを霜田氏が和紙に墨書し、

これも撮影した。一連の出来事がすべて即興で行なわれた。ひらめきと即応力に私は驚き、自分の頭の固さを恥じた。

15日(金) この日は**芸術の森美術館へ**。ガラス工芸、陶芸品に監督は夢中。展覧会はパスして、墨絵アニメを制作している**横須賀令子さん**のご自宅兼アトリエへ。横須賀さんの作品『GAKI 琵琶法師』を見せていただくと、作品に興味を持った監督は比喩を駆使し、非常に哲学的なコメントを連発した。墨絵アニメの制作現場は監督も

創作者として大きな刺激を受けたようであった。

次はクリエイティブアニメの**キューウイフィルム**のスタジオ。製作者の**齋藤栄子さん、岩澤奈美子さん**が実際にセットを組み、人形を動かす様子を見せてくださる。突然、監督は若いお二人に震災インタビューを申し入れ、齋藤さんの愛車、ミニカーパーに通訳の私を含む4人が乗って撮影は30分におよんだ。



被災地20カ所6時間の撮影を行ったばかりの『災い FUKUSHIMAの悲劇』を上映会当日流していたハワイ工風景

製作の**齋藤栄子さん、岩澤奈美子さん**が実際にセットを組み、人形を動かす様子を見せてくださる。突然、監督は若いお二人に震災インタビューを申し入れ、齋藤さんの愛車、ミニカーパーに通訳の私を含む4人が乗って撮影は30分におよんだ。

WS会場のかでる2・7に着いたのは開始の17:30直前。告知期間がなく参加者がいるか心配だったが幸いに道新夕刊で紹介されたこともあり40名近くが集まった。『災い』を鑑賞し、監督との討論に移った。「被災地でシャッターを切るタイミングが分からない」という若いカメラマンの戸惑いには「ドキュメンタリー作家としての使命はまず記録すること。思考は後からついて来る」と明快だった。彼の長編『ヴァインツェンスの足跡を追って』を上映後、「小さな祖国」という言葉をキーワードに民族に関する討論が行われる。筆者を含め日本人の大部分にはいまひとつピンと来なかったが、そこそが異文化に触れるという、充実した時間であった。

16日(土)映画祭開幕 最初の作品『ぜったいにダメ!』の上映後、大使館の一等書記官ラデック・ティシキェヴィチさん＝写真右＝が到着。ラデックさん、ヴァルデックさんの挨拶に続き『裏面』を上映。一番にプッシュして来た作品だけに入りも一番だった。ハワイエではヴァルデックさんの『災い』を常時上映。ショッキングな報道映像に比べ少し退屈に感じていたのが、モギリしながら何度も繰





り返し見るうちに「日常の中に起こった非日常」という人間に寄り添った監督の視点が深く理解された。

1日目の上映後、ポーランド大使館主催のレセプションが全日空ホテルで開かれた。スタッフだけの打ち上げと違い、今回知り合った周囲の方たちも招待することで、いろいろな出会い、プロジェクトの立ち上げ、今後の企画の打診など、創造的な集まりになったと思う。

17日(日)映画祭2日目 初日はあいにくの強風と雨、2日目は寒かったが、多くのお客さまに来ていただいた。8回目の上映を終え、会場の学術交流会館の前で記念撮影。祭りが終わった後の一抹の寂しさを感じていたのは筆者だけではなかったろう。当初は大任のプレッシャーに潰されそうだったが、実際に動き出すと、涼しい顔で自分の仕事を淡々とこなす映サスタッフの姿に触れ、大船に乗った気持ちで当日を迎えることができた。ぜひこのチームでまた何かやりたいと思えたことが自分にとって一番大きな報酬であった。ヴァルデックさんの二日目の舞台挨拶を引用して感謝の言葉の代わりとしたい。

「今回の原発の事故で私が感じたのは、文明と自然の対立です。文明はこれ以上先に進んでもいいかどうかという問いかけです。ひとは美を作り出すために、自然の力を借ります。庭に花や樹木を植えるのもそのひとつです。それでは文明には美を生み出す力はないのでしょうか。映画は文明の側に属するものです。映像作家として私の試みは映画という文明の力を利用して人の中に美を創造することなのです」 事務局長 (さみっ・しんいち)

ポーランドの心が広がる 映画会を実感

栗原 朋友子

このたび「ポーランド現代映画セレクション 2004-2009」の上映会は「札幌映画サークル」と「北海道ポーランド文化協会」の初めての共同作業として行われました。これは駐日ポーランド共和国大使館の特別の協力があって実現しました。「札幌映画サークル」は映画鑑賞団体としてこよなく映画を愛する方々が、老若男女、居住地を問わず、活動している団体であるということでした。

「北海道ポーランド文化協会」はポーランドと北海道の間の文化交流を促進することを目的とし、文学・歴史・美術・映画・音楽などポーランドの文化を幅広く愛する人々が結集した運動体です。この二つの団体のポーランドという国に関する理解度が異なるのは、仕方のないことです。しかし今回の映画会はお互いの会の性格を理解した上で分担作業をした良い会だった、と思います。下準備を早くからしてくださった「札幌映画サークル」の方々には心から感謝の意を表します。それに比して、「北海道ポーランド文化協会」は運営委員の有志が当日のお手伝いをしたにすぎませんでした。

チケットもぎりを担当したポ文協の一員として特に印象に残ったことがありました。札幌在住のポーランド人のダニエルさん=写真右=が来場者の一人一人にポーランド式に「Dzień dobry」(Prosze bardzo)と丁寧に声をかける紳士的なあいさつは、ポーランドを知らない人にも好印象を与えたことと思えました。言語と文化の壁を乗り越えて、映画を観る前に紳士淑女の国ポーランドの文化の一端を感じ取っていただけたのではないかと、思い、ポーランドを愛するものとして嬉しく思いました。



副事務局長 (くりはら・ともこ)



「上映記念レセプション」ではみんなの笑顔がひろがった 2011/4/16 全日空ホテルにて



— 親愛なる —
バルデック・
チェホフスキへ
霜田千代麿

昨年の3月に初対面で意気投合したバルデック・チェホフスキが、何の因縁かポーランド映画セレクション2004-2009(当協会例会)に合わせて再度来道された。彼は今回ポーランドから東京へ来るや否や、在京のポーランド大使館の一等書記官ラデック君の運転で、東北の震災地を訪ね、沢山のビデオ映画を撮ってきた。全く、ドキュメント映画監督としての魂には恐れ入る外ない。

その昂奮さめやらぬエネルギーで北海道へのり込んできた。頭より“ユゲ”が出ていた。当協会の配慮に依り、急ぎよ次の様なスケジュールが組まれた。

江別の「ドラマシアターども」で再会をしたバルデック(左)と著者



4月14日(木)朝9時半 チェホフスキ氏 千歳空港着。佐光、氏間、札幌映画サークルの人が出迎え札幌を案内。

午後3時30分、江別「ドラマシアターども」にて霜田合流。災害地のフラッシュ・フィルムを観せていただく。霜田と浅野由美子(美術家)の2人、墨で大紙4枚に「災い FUKUSHIMA の悲劇」と監督の要望により書く。明日のワークショップの準備、映画上映中にロビーを飾る為。

4月15日(金)午後5時30分。かでの2・7 510号室でワークショップを行う。大盛況。

4月16日(土)午前11時。北大学術交流会館にて、「ポーランド現代映画セレクション2004-2009」上映。協賛である大使館のティシュキェビッチ一等書記官と特別ゲストでチェホフスキ氏が幕間の挨拶をする。

この日、僕の観たポーランド映画では『裏面』『救世主広場』に強いインパクトを覚えた。

終演後、全日空ホテルに於いて、大使館主催による「上映記念レセプション」が開催された。氏間さんの司会に

より、主催者ラデック、当協会安藤会長による、例会と一緒に実行委員会を構成した札幌映画サークルに対しての謝辞があり、霜田の乾杯の音頭“ナズドロビェ”で祝宴が始まった。この日のパーティは札幌映画サークル関係者が多く盛り上がった宴となった。

また、北大のアイヌ研究者の井上名誉教授も出席されており、ピウスツキについてのスピーチをされていた。

バルデックは明日是非、小樽市へ行ってみたいとの事で、来年ピウスツキの像を制作する人と、その友達の方に車で案内してもらえないかと、あつかましくも小生から頼み込んでみた。心よく、明日朝8時にホテルへ彼を迎えに行くと言ってくれた。これもバルデックの人徳か？後で聞くところによれば、その日、午後小樽より戻り、午後3時より、レクチャーをもったとの事である。この男のエネルギーは凄まじいと改めて感じ入った。

話は前後するが、パーティの後、私とパーティに来られていた一人の女性とバルデックのホテルの部屋へ招かれた。

結論はこうだ。次回彼が北海道へ来た時は登別の知里幸恵記念館を一緒にたずねる。そこでボクは墨象をやる。彼女とバルデックと僕の3人でワークショップをすることが決まった。彼女は知里幸恵の詩集の英語版を次の日バルデックのホテルへとどけると約束してくれた。

・・・バルデックに色んな宿題を出され、そして、別れた。
Do zobaczenia (ド・ゾバチェニア) また、会いましょう！

副会長 (しもだ・ちよまる)

監督がお気に入りの場所「ドラマシアターどもIV」「ども」は安念智康氏のニックネームで、喫茶店の名前であり劇団の名前



どもさんと笑顔の素敵な奥様がまさんには、今回もたいへんお世話になった



深い感動を呼ぶ 珠玉の名作ふたたび

～ ポーランド映画から ～

柏木 由美子

『裏面』を見て、昔見たポーランド映画を思い出しました。映画のタイトルは忘れてしまいましたが、こんな内容でした。ある若い女性が身に覚えのない罪で逮捕され、投獄されました。長年の服役終了後、彼女は外の世界に連れ戻されるのですが、あるアパートの階段まで連れてこられて「ここがおまえの夫の家だ。夫と子供が待っている」と言われます。結婚したことも子供を産んだこともあるはずのない彼女は怪訝そうな顔でそのアパートのドアを見つめる、というシーンで終わる映画でした。

逮捕されたときは若く生き生きとしていた彼女ですが、服役後は眉間にしわが刻み込まれ、目はうつろで、失われた時間の重さを物語っています。社会体制に翻弄される運命を描いた映画は、いかにもポーランドらしいポーランド映画のように思えます。『裏面』からも社会体制という巨大な怪物とそれを守ろうとする公安の冷たさ恐ろしさ、ささやかな幸せを懸命に守ろうとしている庶民の生活を垣間見ることができます。サビナと母親、祖母は特別裕福ではないけれど、日々の暮らしを丁寧に過ごしている。その中でサビナは硬貨を飲み込んで排出する。ブロニスワフはなぜそれを知っていたのでしょうか。想像すると背筋が寒くなります。

妊娠してしまったサビナに対する母と祖母のセリフも印象的です。「愛情なんていつかなくなるけど、子供は産んでおけば後々心強い」といったような内容でした。人生の苦楽を味わい尽くした母と祖母の、なんて割り切った、したたかな考えでしょうか。

そうして生まれた子供が父親のブロニスワフにそっくりな息子で、しかし父親とは違いとても優しく、さらに、父親が公安だったのに対して、息子はカトリックポーランドのタブーであるゲイだということにブラックユーモアを感じます。子供を産んで、社会体制の変化を経験し、サビナの人生はどんなだったのでしょうか。

息子がこのように優しい人に育ったということは、サ

ビナも母親としての幸せは味わったのだらうと想像します。サビナもその母や祖母同様したたかに自分の人生を送り、ブロニスワフを殺したことは墓場まで持って行くのでしょう。

『ぜったいにダメ!』→
『あなた、嘘をつかないで』↓



人気女性脚本家ウェブコフスカによるラブコメディの傑作2作品。

今回は上映された4本とも見せていただきました。『ぜったいにダメ!』『あなた、嘘をつかないで』は、今までに見たことのない種類のポーランド映画でした。このような楽しい現代ポーランド映画を、是非また上映して下さい。4本の映画を自分の好みでおもしろかった順に勝手に順位をつけるとしたら、

- 1位 『ぜったいにダメ!』
- 2位 『あなた、嘘をつかないで』
- 3位 『裏面』
- 4位 『救世主広場』です。みなさんはどうでしたか。



<著者紹介> 20年ほど前までは、シヨパンはフランスかどこかの人だったっけ?という程度のポーランド認識しかなく、ポーランドは私にとって白地図地帯でした。そんな私が、1993年に青年海外協力隊の日本語教師としてポーランドに行く機会を得ました。マレーシアでの日本語教師の仕事(同じく青年海外協力隊)を終えて、帰国し、仕事を探している時にポーランド行きのお話を目にしたので、「おもしろそう!」と飛びついたわけです。それがポーランドとの出会いで、帰国後ポ文協のことを知りました。

文・写真 (かしわぎ・ゆみこ)

評判のよかった
モギリ嬢とモギリボーイ
(左から) 安藤むつみさん
著者、ダニエルさん





↑ サヨナラ 最終日、チェホフスキ監督とティシュキエヴィッチ書記官を囲んで、会場を背景に記念撮影。



イラストレーターにチラシとポスターを発注した。これがモノを言って自信満々に配布できた。
← プロの技



3つの受付

- ← 1階 当日券売り場
- ↑ 2階 映サ入会受付
- モギリ 博文協担当





↑ワークショップ 4/15 かでる2・7。「小さな祖国」を説明するチェホフスキ監督と通訳の佐光実行委員長。映画タイトルの墨書を飾り、質疑・討論。飛び入りに近い企画だったがポーランド映像作家の震災ドキュメントに関心は高く盛会だった。



↑人形浄瑠璃の撮影 「東海道中膝栗毛」の弥次喜多人形(写真左)「三番叟」(写真右)一部を収録。文楽人形に触れ、ご満悦の監督。

↑舞台挨拶 チェホフスキ監督の最後の言葉に多くの人が感動した。

↓大使館主催レセプション 16日夜上映後に全日空ホテルで。映サ、ポ文協など47人が参加。乾杯、談笑のなかの記念撮影。右はポーランド国歌の合唱





観客のみなさんの
「アンケート」を
紹介します。

ありがとうございました！



Wybór filmów polskich
współczesnych

左から 『裏面』
『救世主広場』
『ぜったいにダメ!』
『あなた、嘘をつかないで』

<p>映画もワークショップもとても良かったです。自然と文明の問いかけ私も同感です。沢山の参加で驚きました。(70代 男性)</p>	<p>『裏面』の主役の演技スゴ！感激しました。時代背景を知っていれば、もっと楽しめたかな・・・(20代 女性 I・S)</p>	<p>ポーランド劇映画祭グランプリを受賞した『裏面』(2009)よりあとの作品を観てみたいです。(40代 男性 T・T)</p>
<p>娘の話聞き、昨年より少しづつポーランドに興味がありました。今、自分の信仰している宗教の知人もポーランドについて話してくれました。今度、本当に行ってみたいです。(50代 女性 R・O)</p>	<p>『裏面』とても面白い作品でした。講演も少しだけ聞くことができ、違う場所違う国のことも共感しながら見ることができる映像の力を改めて感じました。(20代 女性 E・N)</p>	<p>『裏面』は勝手な思い込みのイメージ通りの内容でよかった。『あなた、嘘をつかないで』のコミディで何となく救われたようです。横にいる人が信用できないことは恐ろしいですね。(60代 女性)</p>
<p>『裏面』はどうなるか先が読めずにワクワクした。女性の強さを感じた。(20代 男性)</p>	<p>Super!!! Bardzo ♡♡ もっとポーランド映画が観たいです。(20代 女性 M・O)</p>	<p>観られる機会のない作品を上映頂き、ありがとうございました。(30代 女性)</p>
<p>全体にシリアスなものともコミディをとりまぜて良かった。『裏面』は過去の肅清の時代を、『救世主広場』が一番印象的だった。嫁・姑の問題、夫の浮気、ヒロインのこわれていくさまが痛々しかった。住宅問題や職の問題、この家族にお金があれば解決の糸口も、またこのように憎み合うことも傷つけあうこともなかったと思う。『あなた、嘘をつかないで』は美しい街並みが良かった。(60代 女性)</p>	<p>ハリウッド映画のようなチャライ内容に比べやはりヨーロッパ映画はいい。4本それぞれに味わい深いものがあり、ポーランド映画のイメージが新たになった。現代のポーランド映画の魅力が十分に伝わり 映像・音楽が素晴らしい。(50代 女性)</p> <p>仏映画をしのぐラブコミディ。ポーランド映画もすてたものじゃない。(60代 男性)</p>	<p>我々が見てきた映画といえば、ワイダとかポランスキーとか。こういう『あなた、嘘をつかないで』のノーテンキな映画は楽しい。ロシア映画にも見えるが、ロシア、ポーランド文化の研究者は皆、きまじめなんでしょうね。(50代 男性)</p> <p>『裏面』面白かったです。会場も座席にテーブルがあって良かったです。機会があればまた来たいです。(30代 女性)</p>
<p>『あなた、嘘をつかないで』はコミカルな会話が素晴らしい。充分楽しめました。(60代男性 Y・A)</p> <p>とにかく素晴らしかったです。(50代 女性)</p>	<p>『あなた、嘘をつかないで』はスタンダードだけど笑えてホロリでゲー。『救世主広場』は後半「？」という部分があり・・・ちょっと欲求不満でしたが良かったです。(50代 女性 K・I)</p>	<p>ポーランドに暮らしたことがあるので、映画を見ていると色々なことを思い出しました。街並みもとてもなつかしく、充分楽しめました。本当にありがとうございます。(60代 女性 Y・O)</p>
<p>『救世主広場』は今まで見たことがない全く新しいタイプの映画で非常に良かった。(女性 S・W)</p>	<p>『裏面』いつの世どこの国でも同じだが男は滑稽、女はしたたかで冷静。(70代 男性)</p>	<p>今後もポーランドなど諸外国の一般劇場での公開しない作品を見たい。(70代 男性)</p>
<p>仕事を休んできました。とても良かった。(50代 男性)</p> <p>『裏面』は映像・音楽の組み合わせがシュール。(60代)</p>	<p>『あなた、嘘をつかないで』はさわやかで清潔感のあるストーリー。冒頭のエメラルドグリーン的大海とパープルの空でグイッとひきこまれた。坂本稔さん(40代)</p>	<p>『ぜったいにダメ!』は最後の部分がものすごく良かったです。また、機会がありましたら見に来ます。よろしくお願ひします。酒井盛暢さん(30代)</p>

